

二〇一五年度

入学試験問題

国語

注意

- ・指示があるまで開いてはいけません。
- ・答えは解答用紙に書きなさい。
- ・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
- ・記号がついているものはすべて記号で書きいれなさい。
- ・句読点や「」も一字とします。
- ・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

□ 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) きれいな和紙でホウソウする (2) ムし暑い気候 (3) 冷たい空気をスウ
(4) ショウボウシヨの角を曲がる (5) 足にケイシヨウを負う

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「虫を食べる」と言えば、ゾツとする人、露骨にいやがる人も多い。頭では納得しても、いざじつさいの場面となり、目の前にすると拒否するというパターンがある。食べものに対する個人の好き嫌いはあつて当然だ。形を拒否する者が多いのも理由として当然だ。ただそこで、なぜ形によって嗜好が違ふのだろうという疑問を持つことが、文化を考えていく **①** になるのだ。それを、「私たちの文化では虫を食べない」「日本人としては食べるものではない」など、根拠がふたしかなまま「私たち」や「日本人」という一般化をはかって自分が食べられない理由とする人がいる。個人の好き嫌いや価値観を当然のものだと考え、それを標準化することは、そうでない人たちを排除する姿勢にもつながりかねない。

② このような安易な一般化は危なっかしい。地域や文化を考える上で陥らないよう気をつける点である。

昆虫を食べるのは、「貧しいからだ」「他に食べものがないからだろう」「海から離れて魚がないからだ」、このようなよく言われる理由づけは、いずれもみずからの食生活を正の基準として、昆虫食はそれよりも劣つたものとしてとらえる、 **③** ではないだろうか。また、虫を食べる人自身も、しばしばその理由を「貴重なタンパク源」という言葉で説明してしまう。これでは、仕方なく食べていると受け取られてしまう。

虫を「美味しい」と受け入れる感覚も、逆に「不味い」「嫌い」と拒否する感覚も、個人の嗜好に基づくように見えて、実は社会的あるいは文化的文脈の中に組み込まれている。昆虫食も各地で行われてきた慣行として成り立っている。そ

れは、地域の社会の中で一つの価値観として共有されている。すなわち、「当たり前」のものなのだ。④「当たり前」の美味しさは、ある社会を理解する糸口にもなる。イモムシやカメムシを食べたことのない人から見れば、それらを食べることにゾツとするかもしれない。スズメバチに挑み、家で飼育するなどということも、危険この上ないと心配するかもしれない。「食べたことがある」あるいは「食べることを知っている」という虫から、身近にいても食べることなど思いもよらないような虫まで、「食べる」か「食べない」かという単純な価値観と行為の違いから、昆虫とその背後の社会を見る **⑤** ができる。そしてその違いは、「食べる」か「食べない」かにとどまらず、食べ方、採り方など技術の違いとしても細分化してとらえていくことができるようになる。昆虫食を慣行としてもとらえられることで、食用にする人たちの広がりや、地域や民族などの単位としても現れる。そして、個人、地域、民族など広がりやのスケールの複層的な違いが見られる。あるものへの対応の仕方はけつして **⑥** 的なものではない。そこに、自分が主体的に入ることによって、さまざまな違いを主体的に受け止められない。つまり、⑦ 虫を食べることで、あるいは、食べようとしても手の伸びない自分に気づくことである。この気づきをスタート地点にしてさまざまなことに対して、どうしてだろうと疑問を持つことができる。

(野中健一『虫食む人々の暮らし』NHKブックス)

(1) **①** (二か所) には共通する言葉が入ります。「き」で始まるひらがな四字で答えなさい。

(2) **②** について「危なっかしい」のはなぜですか。

- ア 自分たちと違う食習慣を持つ文化を否定することにつながるから
イ 同じ価値観を持たない人々に憎しみの気持ちを抱いてしまうから
ウ 「日本人」は異文化の食習慣を受け入れないという誤解を生むから
エ 自分たちの好みにこだわり、食の新たな可能性を無視しているから

(3) **③** にはどれが入りますか。

- ア 客観的な観察力によるもの
イ 差別的な考え方によるもの
ウ 一面的な見方から来るもの
エ 一方的な誤解から来るもの

(4) **④** 「当たり前」の美味しさとはどういうことですか。

- ア その地域の風土や気候に合った美味しさ
イ その地域で長い間親しまれてきた美味しさ
ウ その地域の人が工夫して改良した美味しさ
エ その地域でしか味わうことのできない美味しさ

(5) **⑤** にあてはまるのはどれですか。

- ア 主観 イ 普遍 ウ 個別 エ 具体

(6) **⑥** 「虫を食べる」ということについて筆者はどう考えていますか。

- ア 虫を食べること人間と自然のかかわり方を見つめ直すことができる
イ 虫を食べる経験を通して異なる社会に住む人々に共感することができる
ウ 虫を食べる時の自分の反応を見つめることが異文化理解の第一歩である
エ 昆虫食を考えることにより、その地域や社会の問題点が明らかになってくる

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

自分の色を消し自分のにおいを消してしまった透明人間は、他の透明人間と容易に交換が可能です。

個性的な人間というのはなかなか交換できません。「あの人の近くに行くと、いい人はいいい人なだけどちよつとくさすぎて疲れるなあ」とか、「あの人のいい人なだけど色が強すぎて、ちよつと近づいては離れるっていうふうにしないとこつちまで染められちゃいそうだなあ」とか、においや色が強い人は言われてしまふこともあります。が、やはり個性のある人というのは、そういうものなのです。余人をもつて代えがたい、あのにおいを出せてあの色を持っている、ということにおいて代えがたいのです。アーティストとかを見ても、すごいにおい、すごい色を発している人が多いことに気づくでしょう。

もつとも、⑤交換可能なおいや色というものもあります。部下に威張り散らす強烈なにおいを持った上司同士は交換可能だったりします。またこのタイプのくさい上司が来たよ、ここできつと同じような説教するに決まってる、と思っていると果たしてまた同じような説教をする、とかいったことはあります。これはあまり個性的なおいとは言えないですが、本人だけが自分は個性的だと思っているのでタチが悪いということもあります。

いずれにしても、いい子であろうとする、周りと抵抗なく過ごしていい評価をもらおうとすることだけに一所懸命いっしょけんめいになって、自分を脱臭だつしゅう・脱色だつしきしていくと、私たちはどこまでも交換可能な、自分らしさを見失う方向へ向かっていくことになるのです。

他の人から評価をもらいたいなら、自分をさらけ出し、自分のかけがえのなさで勝負すればいいのですが、私たちの多くは自信もないし、自分のかけがえのなさがどこにあるのかも分かっていませんから、自分を脱色・脱臭して、私は誰にでも合わせる事ができます、空気を読むことができます、自己主張も強くありません、私というのは大した人間ではありませんからどうぞよろしく、と

あつとつてき

① に出て評価を取ろうとする人が圧倒的に多くなつてしまいました。

②、そういう人たちは、ある時自分が交換可能だということに気がつい

てしまいます。

⑤ 困ってしまうのです。私のような人間はこの世の中にど

こにでもいる。何かあればすぐ誰かと交換されてしまう。他の人は私が他の人と交換されても何も困らないと気づいて、愕然とするのです。

「交換可能」の反対語が、「かけがえない」ということです。それは人々となが交換可能でない、とも言えるし、人とお金交換可能でない、つまり私の価値はお金ではないということでもあります。私はモノとも交換可能でない、私は単なる学歴でも会社の役職でもありません。私自身がかけがえないものなのです。

その⑥「かけがえのなさ」がこの社会から失われつつあります。すべての人が、自分はいつか交換されてしまうんだろうな、とどこかで感じているような状況になっています。いつ交換されるかわからないという感覚のもっとも厳しい言い方が、「消耗品」であつたり「使い捨て」であつたり、ということでしょう。

(中略)

一人ひとりが、自分自身をかけがえのない人間だと思うことができなくなってしまう、「自己信頼」を失ってしまった。そして社会の中に本来あるはずの「社会に対する信頼」も失われている。

しかし、自分も信頼できない、社会も信頼できない、そんな状態で人間は生きていけるのでしょうか？

その答えは、断じてNOです。

そんな状態では人間は生きていくことはできません。そんな社会では重大な問題が次から次へと起きてきます。

人の心が壊れはじめたのか……、と考えるような事件がこのところ日本では次々と起こってきています。それらの事件の背後には、この「信頼ほのたのの崩壊ほうかい」があるのです。

（上田紀行『かけがえのない人間』講談社現代新書）

- (1) ①「そういうもの」は何を指していますか。□「ないということ」と続くように、本文中から八字で書きぬきなさい。
- (2) ②「交換可能なおいや色」とはどういうものですか。
ア 個性とは言いがたく、自分だけが良かれと思っているもの
イ 良い個性と言えず、自分自身も変えたいと思っているもの
ウ 一定の役職についた者が、身につけなければいけないもの
エ 誰でも真似まねできるような、特徴とくちょうをもった強くてくさいもの
- (3) ③「自分を脱臭・脱色していくと」どのような存在になりますか。たとえとして表現しているところを探し、「□になる」と続くように、本文中から四字で書きぬきなさい。
- (4) ④に入る、「へりくだった態度」という意味を持つ二字の漢字を答えなさい。
- (5) ⑤・⑥に入る言葉をそれぞれ答えなさい。
ア たとえば イ そして ウ つまり エ しかし オ だからこそ
- (6) ⑦『「かけがえのなさ」がこの社会から失われつつあるのは何が原因ですか。本文中から五字で書きぬきなさい。』

④ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

画を好かぬことはまず少ないとしてそのうちにも自分はこどものとき、何よりも画が好きであった。(と岡本 某が語りだした。)

①A こそのもの ②B とやらで、自分も他の学課のうち画では同級生のうち自分におよぶものがない。画と数学となら、はばかりながら誰でも来いなんて、自分も大いに得意がつていたのである。しかし得意ということは多少競争を意味する。自分の画の好きなことはまったく天性といってもよからう、自分を独りで置けば画ばかり書いていたものだ。

独りで画を書いているといえはしごくおとなしく聞こえるが、そのくせ自分ほど腕白者は同級生のうちになんばかりか、校長が持てあましてしばしば退校をもつておどしたのでも全校第一ということが分かる。

全校第一腕白でも数学でも。しかるに③天性好きな画では全校第一の名譽を志村という少年にうばわれていた。この少年は数学はもちろん、その他の学力も全校生徒中、第二流以下であるが、画の天才に至ってはまったく並ぶものがないので、わずかに④墨を摩そうかともいわれる者は自分一人、その他は、ことごとく志村の天才をあがめたてまつっているばかりであった。ところが自分は志村を崇拜しない、今に見ろという意気込みでしきりとはげんでいた。

元来志村は自分よりか歳も兄、級も一年上であったが、自分は学力優等というので自分のいる級と志村のいる級とを同時にやるべく校長から特別の処置をせられるので自然志村は自分の競争者となっていた。

しかるに全校の人気、校長教員をはじめ何百の生徒の人気は、おとなしい志村に傾いている、志村は色の白い柔和な、女にしてみたいような少年、自分は美少年ではあったが、乱暴な傲慢な、喧嘩好きの少年、おまけにいつも級の一番をしめていて、試験のときはかならず最優等の成績を得るところから教員は自分の高慢がしやくにさわり、生徒は自分の圧制がしやくにさわり、自分にはどうしても人氣がうすい。そこでみんなの心持ちは、せめて画でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱をくだいてやれというつもりであった。自分はよくこの消息を解していた。そして心中ひそかに不平でならぬのは志村の画かならずしもよくできていないときでも校長をはじめみんながこれを激賞し、自分の画はたしかに上出来であつても、さまで賞めてくれ手のないことである。⑤こどもながらも自分は

いチョークの色にはおよばない。画題といい色彩といい、自分の是要するに少年が書いた画、志村のは本物である。技術の巧拙は問うところでない、かかげてもって衆人の展覧に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方がいいとはいえなかった。

⑥「さなきだに志村崇拜の連中は、これを見て歓呼している。「馬もいいがコンプスはどうだ！」などという声があつちでもこつちでもする。

自分は学校の門を走り出た。そして家には帰らず、すぐ田圃へ出た。止めようと思つても涙が止まらない。口惜しいやら情けないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草のうちにぶつたおれてしまった。

足をばたばたやつて大声を上げて泣いて、それで飽き足らず起き上がったところの石を拾い、⑦「方」に投げつけていた。

こう暴れているうちにも自分は、彼奴いつのまにチョーク画を習つたらう、何れが彼奴に教えたらうとそればかり思いつづけた。

泣いたのと暴れたのでいくらか胸がすくとも、しだいにつかれてきたので、いつかそこに臥てしまい、自分は蒼々たる大空を見上げてみると、川瀬の音がそうそうとして聞こえる。若草を薙いでくる風が、得ならぬ春の香を送つて面をかすめる。いい心持ちになって、自分はしばらくじっとしていたが、突然、そう自分もチョークで画いてみよう、そうだという一念に打たれたので、そのまま飛び起き急いで宅に帰り、父の許しを得て、すぐチョークを買い整え画板を提げすぐまた外に飛び出した。

このときまで自分はチョークを持ったことがない。どういう風に書くものやらまるで不案内であつたがチョークで書いた画を見たことはたびたびあり、ただこれまで自分で書かないのはとうていまだ自分どもの力におよばぬものとあきらめていたからなので、志村があのかい書けるなら自分もいくらかできるだろうと思つたのである。

再び先の川辺へ出た。そしてまず自分の思いついた画題は水車、この水車はその以前鉛筆で書いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを写生してやろうと、堤をたどつて上流の方へと、足を向けた。

水車は川向こうにあつてその古めかしいところ、木立の繁みに半ばおわれてゐる按排、蔦葛がはいまとうている具合、こども心にもおもしろい画題と心得ていたのである。これを対岸から写すので、自分は堤を下りて川原の草原に出る

人気というものをにくんでいた。

ある日学校で生徒の製作物の展覧会が開かれた。その出品はおもに習字、図画、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろぞろと押しかける。取りどりの評判。製作物を出した生徒は気がでない、みなそわそわして展覧室を出たり入ったりしている。自分もこの展覧会に出品するつもりで画紙一枚に大きく馬の頭を書いた。馬の顔を斜に見たところで、むろん少年の手にはあまる画題であるのを、自分はこの一挙によつてぜひ志村に打ち勝とうという意気込みだから一生懸命、学校から宅に帰ると一室にこもつて書く、手本を本にして生意気にも実物の写生を試み、幸い自分の宅から一丁ばかりはなれた桑園のなかに借馬屋があるので、幾たびとなくその厩に通つた。輪廓といい、陰影といい、運筆といい、自分はたしかにこれまで自分の書いたものはもちろん、志村が書いたもののうちでこれに比ぶべき出来はないと自信して、これならばかならず志村に勝つ、いかに⑧不公平な教員や生徒でも、今度こそ自分の実力に圧倒さるるだろうと、大勝利を予期して出品した。

出品の製作はみんな自宅で書くのだから、何人も誰が何を書くのか知らない、またたがいに秘密にしていた。ことに志村と自分はたがいの画題をもつとも秘密にして知らさないようにしていた。であるから自分は馬を書きながらも志村は何を書いているかという問いを常にいだいていたのである。

さて展覧会の当日、おそらく全校数百の生徒中もつとも胸をとどろかして、展覧室に入った者は自分であろう。図画室はすでに生徒および生徒の父兄姉妹でいっぱいになっている。そして二枚の大画(今日のいわゆる大作)が並べてかかげてある前はもつとも見物人がたかっている。二枚の大画はいわずとも志村の作と自分の作。

⑨「一見自分はまず荒胆をぬかれてしまった。志村の画題はコンプスの肖像ならんとは! しかもチョークで書いてある。元来学校では鉛筆画ばかりで、チョーク画は教えない。自分もチョークで画くなど思いもつかんことであるから、画のよしあしはともかく、まずこの一事で自分はおどろいてしまった。そのうえならず、馬の頭と鬚髯面をおおう堂々たるコンプスの肖像とは、一見まるで比ぶものにならるのである。かつ鉛筆の色はどんなにたくみに書いてもとうて

と、今まで川柳の蔭で見えなかったが、一人の少年が草のうちにすわつてしきりに水車を写生しているのを見つけた。自分と少年とは⑩四、五十間へだたつていたが自分は一見して志村であることを知った。彼は一心になっているので自分の近づいたのに気もつかぬらしかった。

おやおや、彼奴が来ている、どうして彼奴は自分の先へ先へとまわるだろう、いまいましい奴だと大いにしやくにさわつたが、⑪さりとて引き返すのはなおいやだし、どうしてくれようと、そのままつつ立って、志村の方を見ていた。

彼は熱心に書いている。草の上に腰から上が出て、その立てたひざに画板が寄せかけてある。そして川柳の影が後ろから彼の全身をおおい、ただその白い顔の辺りから肩先へかけて楊をもちたうすい光がおだやかに落ちている。これはおもしろい、彼奴を写してやろうと、自分はそのままそこに腰を下ろして、志村その人の写生に取りかかった。それでも感心なことには、画板に向かうともはや志村もいまいましい奴など思う心は消えて書く方にまったく心をとられてしまつた。

彼は頭を上げては水車を見、また画板に向かう、そしておりおりさも愉快らしい微笑をほおに浮かべていた。彼が微笑することに、自分も我知らず微笑せざるをえなかった。

そうするうちに、志村は突然立ち上がつて、その拍子に自分の方を向いた、そしてなんにもいいがたき柔和な顔をして、にっこりと笑つた。自分も思わず笑つた。

「君は何を書いているのだ」と聞くから、

「君を写生していたのだ」

「ぼくはもはや水車を書いてしまったよ」

「そうか、ぼくはまだできないのだ」

「そうか」といって志村はそのまま再び腰を下ろし、もとの姿勢になつて、

「書きたまえ、ぼくはその間にこれを直すから」

自分は画きはじめたが、画いているうち、彼をいまましいと思つた心はまったく消えてしまい、かえつて彼が可愛くなつてきた。そのうちに書き終わったので、

「できた、できた!」とさけぶと、志村は自分のそばに來たり、

「おや君はチョークで書いたね」

「初めてだからまるで画にならん、君はチョーク画を誰に習った」
「そら先だって東京から帰ってきた奥野さんに習った。しかしまだ習いたてだから何にも書けない」
「①」
それから二人は連れ立って学校へ行った。この以後自分と志村はまったく仲がよくなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元来がおとなしい少年であるから、自分をまたなき朋友として親しんでくれた。二人で画板をたずさえ野山を写生して歩いたことも幾度か知れない。

まもなく自分も志村も中学校に入ることとなり、故郷の村落をはなれて、県の中央なる某町に寄留することとなった。中学に入っても二人は画を書くことを何よりの楽しみにして、以前と同じく相伴うて写生に出かけていた。

【語注】 1 さなきだに…：そうでなくてさえ
2 四、五十間…：約百メートル

(国木田独步「画の悲しみ」岩波文庫『日本児童文学名作集』上)

(1) 「A」こそもののB(なれ)」について、それぞれの空らん二字ずつの言葉を入れ、ことわざを完成させなさい。

(2) C「天性好きな画では全校第一の名譽を志村という少年にうばわれていた」とありますが、「自分」が志村をライバル視する一方で、志村も「自分」のことを意識しているのが分かる一文を探し、はじめの五字を答えなさい。

(3) D「墨を摩そう」とはどのような気持ちですか。

ア いつの日か周囲から良い評価をもらおうという気持ち
イ どうにかして志村に画の実力で上回ろうという気持ち
ウ 画以外の実力ではすべて上回っているので満足する気持ち
エ 自信のある画でも勝つことができにくく思う気持ち

(4) E「こどもながらも自分は人気というものをにくんでいた」とありますが、それはなぜですか。

ア 人気が増すと画の出来がますますよくなっていくから
イ 人気が画の出来以上に作者の評価を定めるから
ウ 人気は勉学の成績とは関係なく、画の出来だけで決まるから
エ 人気は人の思いではなく、勉強と画の両方の成績から決まるから

(5) F「不公平な教員や生徒」のうち、「生徒たち」を指す表現を本文中から七字で書きぬきなさい。

(6) G「一見自分はまず荒肝を抜かれてしまった」とありますが、それはなぜですか。次の説明文の()に入る語句を本文中から書きぬきなさい。

自分と志村の画のできばえは(①)と(②)という歴然とした差があったから

(7) H「方」には四字熟語が入ります。それぞれ適切な漢数字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

(8) ①「さり」と引返えすのはなおいやだし」と感じたのはなぜですか。

ア せっかくの画題をみすみすあきらめるのはいやだったから
イ このチャンスをはがすとチョーク画にチャレンジする機会を失ってしまうから
ウ またしても志村に自分がまかされたような気持ちになってしまうから
エ 自分がすこしの勇氣さえ持てば志村と仲良くできると思ったから

(9) ①に入る、「自分」の一言を次の中から選びなさい。

ア 今日ではくはずいぶんチョーク画についてわかったよ。 イ 次の展覧会では君よりも良い画を出品するさ。
ウ もはやぼくの画は君には勝てないさ。 エ コロンブスはよく出来ていたね、ぼくはおどろいちゃった。

【五】 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

平安時代の宮廷を舞台とする恋愛物語を読んでいたら、心のやりとりというのは全部歌をとどける、そのお返しをする、気に染まなかつたら歌なしで何も記さず、山吹の薄葉に、カワラナデシコの花一輪だけ、使いにもたせてやる。そんなやりとりの繰り返しがそのまま物語になってゆきます。そういう心のやりとりをする習慣が、その時代の文化でした。そういう習慣をさえたものは何だったかと言えば、歌を詠み、歌を送る、返すという確かな注1リテラシー、読み書き能力です。

文化が習慣になるのに決定的な力となってきたものが、リテラシー、読み書き能力の確かさでした。心のやりとりの道具が、郵便、手書きの手紙、ワープロの手紙、電話、携帯電話、FAX、パソコンのメール、携帯メール、多々さまざまになったままの、いまはどうでしょうか。そうした道具、機器は、時代のリテラシー、読み書き能力をどれだけ確かにするものとなっているかということを考えるのです。

いま、実に多様なコミュニケーションの道具、ツールをわたしたちにもたらしできたもの、もたらししているものは、技術であり、たゆみない技術の革新から、たゆみない道具の変化がもたらされ、それがたゆみなく新しい状況を次から次にもたらししているのにもかかわらず、それらのきわめてすばやい技術の展開によつてひろくもたらされてきたのは、習熟の欠如です。技術を習熟するということがなくなった、あるいは習熟することが必要とされなくなった。

経験知というものの、経験して知ることが大切なことではなくなった。できるかできないかは、それは道具の能力の問題であつて、もうそれぞれの人の能力の問題ではなくなっています。そう言つてよければ、人の能力を問う必要がなくなった。そういうふうになつてきています。技術というものは、そういうものであり、そのことによつてわたしたちがどれほど多くの便益を得てきたかは言うまでもないことなのですが、一つだけどうしてもまづいことがのこつたままになった。それはリテラシー、読み書き能力の無表情化、無個性化、平均化、そしてその結果としての無力化です。

携帯電話やFAXやパソコンのメールや携帯メールが、言い回しや注2ヴォキャブラリーを【I】するのでなく、逆に、ニュアンスや表情をどれほど

【II】 してきたか、ということを考えます。笑うは爆笑で、破顔一笑も注3 呵大笑もない。わかつたは了解で、合点も承知もない。頃合や時分を計るといふこともなく、なにより間や間合をとることが、人と人のあいだに、いつかなくなりました。メールなどで、注4 すぐにあからさまな表情をもつ絵文字にたよるようになったのも、いまわたしたちのものも言葉がそれだけ表情をなくした言葉になつてゐる、その渴きのせいなのかもしれません。

技術革新というものの命題は、時間を短縮することです。ところが、リテラシー、読み書き能力というものは習得によつて、習熟によつて、ながく時間をかけてしか得られない、そういうきわめて日常的な性質をもっています。日々の習慣となつてはじめて得られる、そういうリテラシー、読み書き能力によつて人が手に入れるのは経験と判断です。その経験と判断は、失敗や後悔のような苦い経験や間違いからみちびかれることも少なくありません。

そういうリテラシー、読み書き能力のあり方について、わたしは「ことばのダシのとるかた」という詩を書いたことがあります。(略)

かつおぶしじゃない。

まず言葉をえらぶ。

太くてよく乾いた言葉をえらぶ。

はじめに言葉の表面の

カビをたわしでさっぱりと落とす。

血合いの黒い部分から、

◎言葉を正しく削つてゆく。

それが言葉の一番ダシだ。

言葉の本当の味だ。

だが、まちがえてはいけない。

他人の言葉は【III】にはつかえない。

いつでも◎自分の言葉をつかわねばならない。

そうした「言葉のダシのよく効いた」日々のリテラシー、読み書き能力が、わたしは、人それぞれにとつての文化というものだろうと考えています。効率と便益を生みだすものが技術だとすれば、文化というのはずっと非効率で、そうすることがいいと思うからそうするといったくらいに便益しかもたらさない。

【IV】、人の生き方の姿勢をつくるものはそうした日々の習慣としての文化だろうと思つてゐます。習慣をつくりだすのが文化です。

次から次へ新しい便益の高いものに次々に手をだしながら、しかし、ふりかえつて、そうした新しい便益の高いものに徐々に手をはなれながら、しかし、ふりかえつて、その賑やかさのなかに、何かが決定的に欠けているという感覚がのこる、ということ、もうずっと繰り返しているような感じがします。けれども、どこか「言葉の本当の味」が感じられないというような日々がまだまだつづくような気がします。

【語注】 1 リテラシー…読み書きの能力や、それを活用する能力

2 ヴォキャブラリー…語彙 本文では、日本語の単語全体をさす

3 哈哈大笑…大声でからからと笑ふこと

(長田弘『なつかしい時間』岩波書店)

言葉が透きとおつてくるまで削る。

つぎに意味をえらぶ。

◎厚みのある意味をえらぶ。

鍋に水を入れて強火にかけて、

意味をゆつくりと沈める。

意味を浮きあがらせないようにして

沸騰寸前サツと掬いとる。

それから削つた言葉を入れる。

言葉が鍋のなかで踊りだし、

言葉のアクがぶくぶく浮いてきたら

掬つてすくつて捨てる。

鍋が言葉もろともワツと沸きあがつてきたら

火を止めて、あとは

黙つて言葉を漉しとるのだ。

言葉の澄んだ奥行きだけがのこるだろう。

- (1) ①「そういうもの」とはどのようなものですか。「 もの」に続くように十五字以上二十字以内で、本文中の語を使って説明しなさい。

- (2)

I

・

II

にあてはまる組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|----------------|-------|
| ア | Ⅰ容易に | Ⅱ難しく |
| イ | Ⅰゆたかに
めいりよう | Ⅱ貧しく |
| ウ | Ⅰ明瞭に | Ⅱ不明瞭に |
| エ | Ⅰ積極的に | Ⅱ消極的に |

- (3) —
 ⑤ 「すぐにあからさまな表情をもつ絵文字にたよるようになった」のはなぜですか。

ア リテラシーの無表情化によって、人々の喜怒哀楽がはつきりしなくなったから
イ リテラシーの無個性化によって、人々が間合いをとることが苦手になったから
ウ リテラシーの平均化によって、人々がまるで同じような表現をしているから
エ リテラシーの無力化によって、人々の感情表現の方法が貧困化しているから

- (4) 「ことばのダシのとりかた」について、あとの問いに答えなさい。

- ①「言葉^①を正しく削^②つてゆく」作業、③「厚みのある意味をえらぶ」作業の裏づけに必要なことは何ですか。本文中から五字で書きぬきなさい。
- ②に入る適語を本文中から二字で書きぬきなさい。
- Ⅲ
- ④「自分の言葉」を得るためには、さまざまな工程が必要であると書かれています。これは、「言葉」がどのようなものだからですか。本文中から四十字以上四十五字以内で探し、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。
- ⑤「言葉」に続くように本文中から四十字以上四十五字以内で探し、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

- (5) IV に入る適語を選びなさい。

- ア
けれども
イ
つまり
ウ
だから
エ
なぜなら

- (6) 次の文章は、――
 ㊦「そうした新しい」という感覚のこる」を説明したものです。
 ㊱
 ㊲
 ㊳にあてはまる適語を本文中から探し、書きぬきなさい。

- 次の文章は、――⑤「そうした新しいという感覚がのこる」を説明したものです。
ただし、すべて漢字二字が入ります。
- ①
く
- ③
にあてはまる適語を本文中から探し、書きぬきなさい

我々の技術は、①を②することや多くの便益を得ることと引きかえに、③を失ってしまっているのかもしれない。そのことにうすうす気づきながらも、我々は日々の生活を送っている。

- (7) この文章の内容と一致するものを選びなさい。

技術革新が進んだ社会では、人は多くの経験をもとに素早く判断し、効率的に必要なものを選び取る必要がある。イ 平安時代の心のやりとりは素晴らしく、賞賛に値するので、現代でもそれを継承^{けいしょう}して取り組んでいくのが望ましい。ウ 人は、非日常的・非効率なものの中から得られるものが数多いことを分かっているが、利便性を追求している。エ 日々の習慣における多くの失敗や後悔の中からリテラシー^{リテラシー}というものは洗練され、表現の多様性につながっている。

2015年度 入学試験

国語解答用紙

氏 名

受験番号

- ・句読点や「 」も一字とします。
- ・記号の付いているものはすべて記号で答えなさい。

一	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	ハウソウする	ム し 暑 い	ス う	ショウボウショ	ケ イ シ ョ ウ

二	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
	き					

三	(1)	(2)	(3)	(4)
	(5)	(6)		
	Ⓔ	Ⓕ		

四	(1)	(2)	(3)	(4)
	こそものの	(なれ)		
	(5)	(6)		
		①	②	
	(7)	(8)	(9)	
	方	方		

五	(1)	(2)	(3)	(4)
			①	
	(4)			
	②	③		
		～		
	(5)	(6)	(7)	
	①	②	③	

合計	
----	--